２０２２年１月２日　「神の言を聞くイエス」　高橋克樹牧師

ゼカリヤ８章１～８節、ルカ２章４１～５２節

ルカ福音書は２章の中盤からイエスが誕生した後の出来事を記しています。羊飼いたちが飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子に出遭ったあと、イエスは両親によって誕生８日目にユダヤ人のしるしとしての割礼を受け、天使から告げられた通りイエスと名付けられました（２章２１節参照）。そののち、生まれたばかりのイエスを伴って両親は、その子を主に献げるためにエルサレム神殿に連れて行きます。この神殿奉献の記事によると、イエスの両親がモーセ律法の規定に忠実に従っていることがわかります。『律法』という語が２２節、２３節、２４節と３９節に計４回も出てくるからです。この奉献は、モーセ律法に従って清めの儀式を受けることが目的です。２章２３節で『初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される』とあるように、ユダヤ人の子なら誰もが行う奉献ですが、ここでは「イエスが主（神）によって聖別された」ことに重点があります。つまり、イエスが神によって聖別された特別な存在であることが強調されているのです。また、この奉献はイエスの両親であるヨセフとマリアが律法を守ろうとするユダヤ人の敬虔さを持っていることの証となっています。

さて、その神殿では、イエスが年老いたシメオンという人物によって、ユダヤ人が待ちに待ったメシアであることが証言されます。シメオンは幼子イエスを祝福して次のように言います。『主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。私はこの目であなたの救いを見たからです』（２９～３０節）。この言葉には、メシアに出遭うまでは死ねないという、神に誓った約束事から解放された信仰者の率直な喜びが歌われています。シメオンのこの言葉は、メシアに出遭った以上、もういつ死んでも構わないというユダヤ人の長年の希望がかなった思いが吐露されています。

ところが、救い主（メシア）であるイエスに出会うことができた喜びを語ったシメオンが、母マリアに実は不思議な言葉を残しているのです。３４節から読むと『この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするためにと定められ、また、反対を受けるしるしと

して定められています』。これはわかります。将来において十字架刑死を受け入れなければならないイエスの運命のことですから。

しかし、３５節で『あなた自身も（これは母マリアのことですが）剣で心を刺し貫かれます。多くの人の心にある思いがあらわされるために』という言葉は難解です。この個所はさまざまに解釈されてきました。通常は息子が十字架上で死ぬという苦難を「母親として経験しなければならなかった」ことを示す言葉として理解されてきました。ただ、このあとのルカ福音書によると、母マリアや兄弟たちが群衆のためにイエスに近づけないとき、イエス自身が『わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行う人たちのことである』（８章１９～２１節）と語っています。地上での親兄弟の絆以上に、神の言葉に服従する者同士の関係の方が大切であると語っているのです。そのことは１１章２７～２８節において、ある女性がイエスの悪霊追放の力をほめたたえて、そのような力ある子を産んだ母マリアを賛美したのに対して『むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である』と語っていることでもわかります。信仰者にとって重要なことは、神の言葉を聞いて、しかもそれを行うことが大切だというのです。

このような文脈の中に本日のテキストがあるのです。物語の概略は、イエスが１２歳になった時、両親に連れられて過越祭にエルサレムに参拝したが、帰路、イエスは両親とはぐれて迷子になってしまいました。両親は親類や知人の間を捜しまわったのですが見つからず、エルサレムに引き返しつつさらに捜しまわって、３日目にやっと神殿で見つけたという内容です。

詳しく検討するために４１節から見ていきましょう。両親のヨセフとマリアは過越祭には毎年エルサレムへ旅をしていました。これは両親が敬虔なユダヤ教徒として生活していたことを示しています。イエスが１２歳になったときにも、イエスを伴って『祭りの習慣に従って』（４２節）エルサレムに赴いたのでした。ユダヤ人の男子は１３歳で「律法の子」（バルミツバー）と言われる成人式をむかえます。この時から一人前のユダヤ人として律法の定めを守る義務を負い、責任を全うする生き方に入ります。ですから１２歳という年齢のイエスはまさに成人する直前の段階にあるので、まだ完全には成人しておらず、イエスは霊的にも知的・身体的にも成長途上にあったわけです。そのようなイエスが両親と共に過越祭をエルサレムで過ごします。

７日間の過越祭の期間が終わって、両親はイエスがなおエルサレムに留まっていることに気づかず、旅の一行の中にいるものと思い込んで、帰途に就いたのです。一日分の道のりを進んだのち、宿か夕食の準備に取りかかった時に初めて、両親はイエスの不在に気づきます。そして親戚や知人の間を捜しまわります（４４節）。当時の巡礼は地域ぐるみで行われ、旅の一行は同じ村に住む親戚や隣人たちで構成されました。ナザレとエルサレムの間にはユダヤ人と険悪なサマリアの町があり、追いはぎ強盗の多いエリコもあったからです。当時の旅路は常に危険と隣り合わせです。

そういう旅の一団の中にイエスはいたのですが、両親はなかなか探し出すことはできなかった。結局、エルサレムまで引き返してしまったのです。そして、そこで見た光景は神殿で学者たちの中心に座って彼らの話を聞き、彼らに質問しているイエスの姿でした。

４８～５０節はこの物語の頂点をなす個所です。神殿でイエスを見つけた両親は非常に驚き、思わず叱責の言葉を口にします。４８節の言葉を原文通りに訳すると、「子よ、どうしてこんなことを私たちにしたのか」となります。新共同訳では「私たちに」という語が訳されていません。イエスが「自分たち両親に」余計な心配をかけたことへの責任を問うているのです。翻訳は両親がメシアであるイエスを叱責するはずがないという先入観が働いているのでしょう。けれども、親であれば当然の叱責でしょう。マリアはイエスに「子よ」と語りかけることで、言外にイエスを親に従順な子であるべきと見なしています。しかも、マリアは『お父さんも私も心配して捜していたのです』（４８節）と語ります。しかし、この言葉によってイエスに対する両親の誤解が明らかになるのです。そして。このテキストの主題が明らかになるのです。実はここでの「お父さん」はギリシア語でパーテールですが、４９節でイエスが『わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だ』と語ったところでの「父」もまたパーテールなのです。

パーテールという語を巡って、母マリアがヨセフを「父」と言ったのに対して、イエスが「父」と言って指し示しているのはヤハウェなのです。イエスは、自分は天の父である神の子である。だから、本来は神の家である神殿に属すべき存在である。両親との絆を断つことを暗に自覚している言葉になっているのです。

しかし、両親はこの言葉が理解できませんでした。イエスの聡明さに驚くとともに、自分たちを困らせたことに腹を立てる両親。これに対してイエスは『どうしてわたしを捜したのですか。わたしが父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか』（４９節）と答えています。あなたはイエスをどこに捜しているのですか、という神学テーマが突然に出現する問い掛けとなっているのです。神殿でのイエスの発見の物語の背景には、当時のルカ福音書の読者の教会で、我々はいつ、どこで、どのようにしてイエスと出会えるかという問いに対するテーマが隠れています。

マリアとヨセフは、イエスの真の所在に気づかないまま、道連れや親族の間を捜しまわったのです。地上の人間的なつながりの中にイエスを見い出そうとしたのです。しかし、それは的外れな捜し方だった。イエスは自分の父の家であるエルサレム神殿に残っていたのです（４３節）。迷子になったのはイエスではなく、実は両親の方だったのです。ナザレという町はイエスの人間の側面を表わしていますが、エルサレムはイエスの神性の側面を表わしているのです。ヨセフ一家はこのナザレとエルサレムの間を往復したように、現代の私たちも似たようなことを繰り返しているのです。現実の生活の中に救いを探しているのですが、救いを見い出すことができないでいることがあるのです。しかし、神の御業は私たちの人生のいろいろな場面で働いているのに、それを見過ごしていることが多いのです。